

# パルミラにおける遺体の棺への納め方 —頭のない遺体からわかること—

西藤 清秀

How to Place the Dead in a Loculus in Palmyra:  
An Observation of the Dead without a Head

Kiyohide SAITO

古代パルミラの葬制に関わる研究の中で、基本的な事柄の検証がなされないまま、いわば常識として扱われ、置き去りにされた状態にあるものが多く存在する。そのような中で、本稿はパルミラ東南墓地 F 号墓 (Tomb BWLH and BWRP) という地下墓で検出された盗掘者に切り落とされた頭と胴部の状態とパルミラ博物館に展示してある塔墓出土のミイラと言われる遺体との比較によって、当時、パルミラではどのような衣装でどの方向に遺体が納められたかを検証した。その結果、遺体は性別に関係なく布に巻かれ、頭位を棺棚奥壁に向け葬られることが判明した。

キーワード：パルミラ、葬制、F 号墓、塔墓、遺体、ミイラ

Basic matters of funerary practices in ancient Palmyra have not been studied. When a field of study has not been properly addressed, anecdotal or untested assumptions often become accepted as archeological or historical facts. This paper attempts to confirm how the ancient people of Palmyra placed the dead in a loculus and how they clothed the dead. When comparisons between corpses with heads cut off by grave hunters in Tomb F (Tomb of BWLH and BWRP) and the dead exhibited as mummies from tower tombs at the Palmyra Museum, it was revealed that there was no distinction between sexes; both males and females were placed with the head oriented towards the innermost wall in the loculus and wrapped with clothes.

Key-words: Palmyra, funerary practices, Tomb F (BWLH and BWRP), tower tomb, dead, mummy

## はじめに

パルミラ (Palmyra) は、シリア沙漠の中央に位置し、シルクロードにおける流通の拠点の一つとして紀元前 1 世紀から紀元後 3 世紀にかけて繁栄した隊商都市であり、ローマやペルシャなど東西文化を積極的に吸収消化した都市である。この都市は、ギリシャ・ローマの都市形成と同様の都市プランを有し、都市を囲むように 4 か所の墓地が営まれ (図 1)、土坑墓的な個人墓を除き、大まかには空間的な構造を有する塔墓、地下墓、家屋墓の 3 種類の形態の異なる墓が建造されている。それらの墓は複数の遺体を葬る家族墓として営まれ、パルミラの過酷な自然環境の中で生き抜く家族という集団の紐帯の強さを垣間見せる葬送構造物である。それらの構造物は、また墓を建造した家族の社会的地位を示す結果ともなっている (西藤 2008)。

パルミラの墓は、建造碑文に見られるごとく、「永遠の家」として生きる者と死せる者の間に位置する家族にとつ



図 1 パルミラ遺跡図

て重要な場として位置付けられる。そして塔墓、地下墓、家屋墓を問わず、墓室内外はまさに「家」の構造と意匠を意識して建造されている。そのような墓には遺体を葬る場所として棺が棚状に組み上げられた棺棚と石棺、さらにおおよそ1歳未満乳児に限定された墓室床面に設けられた土坑墓(西藤 1996)が墓室内に埋葬施設として設けられ、それぞれの棺にあった遺体が葬られる。そして遺体を葬る際には、基本的に副葬品は伴わない場合が多く、ただ限られた若い女性と子供に装身具を伴う場合がある(Saito 2005a)。

本稿ではパルミラの地下墓の調査の結果をもとにして、どのような状態で遺体が棺に納められるのかを言及する。この疑問については、70年あまりのパルミラの墓の発掘調査の歴史の中で今さらという感は歪めないが、未だかつて言及されたことはない。というのはパルミラの葬制研究は、建築史学としての墓、美術史としての彫像や金石文学的な碑文の研究が先行し、純粋考古学的研究はポーランド隊の1959年の調査に始まるといっても過言ではない(Michalowski 1960)。しかし、そのポーランド隊の墓の調査であっても詳細な遺体の報告はなされておらず、墓内部の空間利用や遺体に関わる副葬品や遺体自身の研究が実質的には何らなされていなかった<sup>1)</sup>。それゆえ、本研究ではパルミラ葬制研究の最も基本的な事柄としてこの問題を言及することにする。詳細に遺体の埋葬状態を検証しうる資料として日本隊が1990年から2005年にパルミラ東南墓地で発掘調査を実施したC号墓(Higuchi and Izumi eds. 1994)、E号墓(西藤 2005)、F号墓(Higuchi and Saito eds. 2001)、H号墓(西藤 2005)の4基(図2)をあげ、遺体の納棺方向と納棺時の姿について検討する。特に東南

墓地F号墓で検出された頭のない遺体は、パルミラにおいて遺体をどのような姿・方向で棺に葬ったのかを検証する格好の資料となった。

### 墓の入口方向と遺体の方向

パルミラで現在最も古い墓は、個人墓である。その墓は、東南墓地で発見された紀元前3~2世紀のG号墓と呼ぶ日本隊が調査した墓である。この墓は石蓋土坑墓で中年男性の単葬であり、埋葬者は東に頭位を取っていた。この埋葬された男性には多くの装身具が身に付けられ、後の時期の墓の男性埋葬者の状況とは全く異にする。しかし棚を設け、天井板を架す方法は後の墓の棺棚を作る方法に酷似している(Saito 2005a)。

G号墓に次いで建造された墓が、紀元前2~1世紀のバールシャミン(BaalShamin)神殿境内地下墓である。この墓は、現在パルミラで確認される最古の集団墓(家族墓)<sup>2)</sup>であり、後の家族墓としての埋葬施設としての棺棚の空間使用の先駆けでもある。

現在のところパルミラでは、バールシャミン境内地下墓を最初として家族墓の建造が開始されるが、それ以後に営まれた墓は、個人墓以外ではパルミラの代表的な葬送建築・構造物として紹介されている塔墓、地下墓、家屋墓である。この3種の墓の外見構造上は全く異なるが、墓内部の遺体を葬る埋葬施設は規模的な大小はあるものの、構造・形状はほとんど同じであり、乳児以外は棺棚や石棺に葬られている。

本稿では、埋葬施設の中でも棺棚に遺体がどのような状態でどのような方向に納体されるのかを言及するが、その方向が必然的に墓の入口の方向によって規定されるため、先ず墓の入口方向について検討することにする。

家族墓としての墓の建造は、紀元前1世紀、都市周囲に営まれた4か所の墓地のうちホムス(エメッサ)からパルミラへの東西幹線道路墓沿いの尾根上に営まれた塔墓に始まる。そしてその墓の入口は東西道路に規制される形で谷部に向くように設けられている。この谷の幹線道路であることから、パルミラに数多く建造された墓の中でも、際立った存在を見せ付けている。塔墓は隊商にとっても路線内の一つの標識物であったと考えられている。

パルミラの墓の入口の方向は、墓の谷墓地のように谷部に位置するために墓入口が道に向かって南北に開口する箇所もあるが、他の3か所の墓地では墓の入口の方向は、一定しないように見える。しかしながら、実質的にはその方向は塔墓、地下墓、家屋墓を問わず、入口の開口方向は東西南北を四分割すると東から南方向の間がもっとも多く、次に北から東方向の間、その次に南から西方向の間、そして最も少ないのが北から西方向の間である(図3)



図2 東南墓地墓位置図

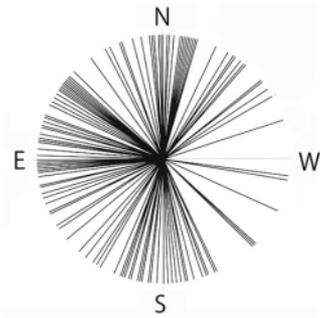


図3 墓入口方向 (Sugihara 2001)

(Sugihara 2001)。北西から南西方向の間に入口を設ける墓は、極めて少ないことが理解できる。その中で真西の方向に墓の入口を設けた墓は、ほとんどない。約7割の墓の入口は南北線より東方向に向けて設置されている。このようにパルミラの墓は、西方向に向いた入口は非常に少ないと言える。それはパルミラの自然環境と地形に制約されたと考えられる。自然環境とはパルミラ地域の気候であり、その中でも風が大きな要因と考えられる。パルミラは、東地中海特有の偏西風が吹く土地柄で、1年を通して強い西風が吹き続ける。さらにその風はアフリカ大陸の砂漠やパルミラの乾燥した土砂を運ぶために、墓の入口が西に設けられていると、それらの土砂が墓室内に吹き込むことになり、墓の清掃作業にけるエネルギーが増すことになる。さらにパルミラの地形は、北西から東南に傾斜しているため、西方向に入口を設けると自然の高低差から必然的に砂が流れ込むことも考慮に入れなければならない。それゆえ墓の入口は地形に直交する形で設けられている。このような理由により、墓の入口は西方向に向かない。

墓室の中の埋葬施設には棺柩、龕内の石棺、墓室床面の土坑があるが、棺柩が基本的な埋葬施設であり、入口から延びる通路状の空間の左右に直交する形で設けられ、奥正面の棺柩は入口方向と並行する形で設けられている。また地下墓の墓室は主室と側室からなるが、側室は主室に対して直交する形で敷設されている。そして側室の棺柩は当然、側室の通路状の空間に直交する形で設けられている。棺の方向は墓の入口の方向に左右され、入口方向は南北線より東方向に向けて設置されているために、遺体を納める方向に方位は意味を持たないと考えられる。しかしながら、発掘調査で検出された遺体は、棺の入口側に頭位をとる場合と、奥壁側に頭位を向ける場合がある。地下墓の特徴として棺柩を構成する床板には石板や陶板が用いられるが、大部分は4枚程度の陶板が使用されている。そしてその陶板が長年の年月で崩れ落ち、遺体もまた崩れ落ちている場合が多く、また水の侵入により骨が浮き、移動する場合もあり、正確に遺体の骨格が解剖学的な位置を保っているものはそれほど多くはないが、その傾向として奥壁頭位を指摘し

たことがある (Saito 2001)。しかし、詳細な検討は置き去りにしていた。それゆえ、本章では以下にそれぞれの頭位にどのような傾向があるかを言及し、F号墓で検出した頭部のない遺体を再検討することによって納棺時の姿を復元できると考えている。

パルミラが繁栄する直前の紀元前2世紀に、後にパルシャミン神殿の境内に含まれたパルミラ最古の地下墓が建造されている。この地下墓は、スイス隊によって調査され、その全容が報告されている (Fellman 1970)。この地下墓は、紀元後2世紀に盛行する地下墓の形態とは趣を異にし、単なる地下をくり抜き内装を施した構造ではなく、半地下式で上部構造は日干し煉瓦や石材で積み上げて構築した構造である。しかし、この墓の墓室および埋葬施設の平面プランは後出する地下墓とさほど変わらず、基本的に進入路の両側に通路に沿って直行する形で棺柩が設けられている。この墓において埋葬施設は14か所検出されているが、入口を有する棺柩は9か所設けられ、46体の遺体が埋葬されていた。そのうち10体が完存もしくはほぼ完存するものであった。46体の遺体のうち明確な性別が報告書に記載されたものは少なく、判別できたのは13体あまり、男性1体で女性は12体である。この墓には後のパルミラの家族墓とは異なり多くの副葬品が納められ、それらがある程度形を整えた状態で出土していることを考えると、盗掘などで後世に荒らされた行為は受けていないと考えられる。このことから人骨の遺存状況が悪くても、頭骨の位置によって頭位を判断できると思われる。46体の棺柩から検出された遺体のうち解剖学的な位置を保った遺体は11体あり、そのうち10体が入口 (墓室通路) 方向に向いている (図4)。

C号墓は、109年にヤルハイ (YRHY) によって建造された地下墓である。この地下墓は、ほとんど盗掘された痕跡はなく、55体 (土坑墓などの1歳未満の乳児は含まず) のうちの14体の遺体がほぼ解剖学的な位置を保っていた。それらの遺体は小児1体、成年男性5体、熟年男性3体、

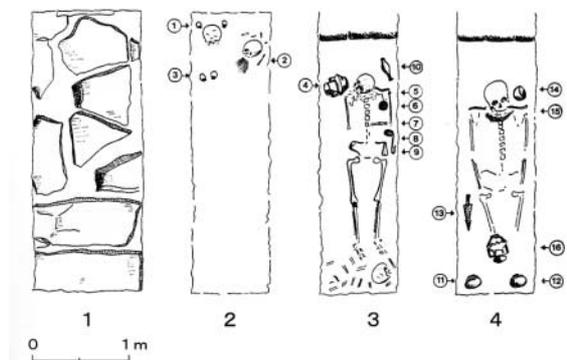


図4 パルシャミン神殿境内地下墓 Loculus 9 平面図 (Fellmann 1970)

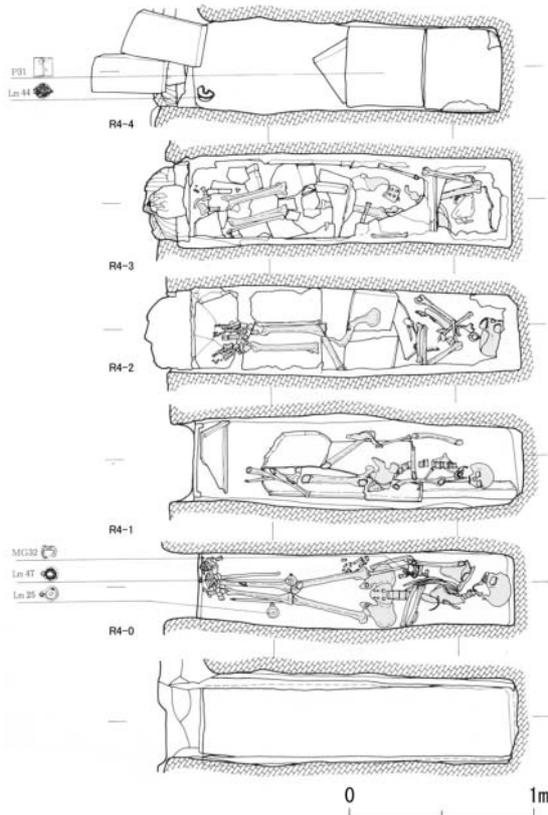


図5 C号墓棺棚 R4 平面図 (Higuchi and Izumi eds. 1994)

成年女性4体、熟年女性1体であり、すべて棺棚の奥壁に頭位を向けていた(図5)。

F号墓は、128年にBWLPとBWRHの兄弟によって建造された非常に地位の高い家族の地下墓である。この地下墓は、盗掘および改葬によって埋葬されていた遺体はかなり乱され、さらにC号墓以上に陶板の落下や水の侵入によって乱れている。そのため遺体は頭骨を含んだ全身骨格で解剖学的な位置を保っているものはさほど多くはなかった。検出した遺体の66体(土坑墓等の1歳未満の乳児は含まず)のうち13体の骨格が何らの妨げ行為もなく解剖学的な位置を保って出土した。それらの遺体は、乳児1体、幼児1体、小児2体、熟年男性2体、老年男性1体、若年女性1体、成年女性3体、熟年女性2体であったが、乳児1体、幼児1体、小児1体と成年女性1体だけが入口方向に頭位を向け、葬られていた。しかしながら、F号墓の場合は盗掘による遺体の乱れが認められる。そのような中でも頭骨が切り落とされているが、他の部位は交連した状態で解剖学的な位置を保つ遺体が2体認められた(図5)。それらの頭骨は無いが、遺体の向きとしては頭位を入口に向けて検出されている。だが、この遺体に関して頭骨は、他の棺棚から検出され、子供でも女性でもないことから、当初から入口側頭位で埋葬されたかは疑わしい。この2体の遺体に関しては次章の遺体の衣装でさらに言及する

ことにする。

E号墓は、C号墓の東に位置する地下墓である。この地下墓からは建造碑文が出土し、228年と刻まれているが、墓の構造や出土遺物から1世紀代から2世紀代であっても問題がないように思われる。この墓は天井部の崩壊が激しく、棺棚も共に崩れ落ちた状態で、棺棚を構成する個々の棺を見極めるは難しい。この墓から検出された遺体は34体(土坑墓等の1歳未満の乳児は含まず)であるが、解剖学的な位置を保っていたのは10体であり、熟年男性2体、成年男性1体、熟年女性3体、老年性別不明1体、熟年性別不明1体、成年性別不明2体であり、それらはすべて棺棚の棺の奥壁側に頭位を取っていた。他に部分的に骨格が解剖学的な位置を保つ遺体が3体あるが、それらも棺奥壁に頭位を取っていた。また、この墓では明らかに頭位を棺棚入口側に向けてのものは皆無であった。

H号墓は、C号墓の東南に位置する地下墓であり、113年にTYBLによって建造された。この地下墓も天井が陥没し、一部棺棚には影響を与えているが、奥棺室以外はさほど盗掘を受けた痕跡はない。しかし水の侵入によって棺棚が崩落・攪乱している箇所が多く存在した。H号墓には少なくとも130体の遺体が埋葬され、男性34体、女性31体、若年9体、子供39体と乳児14体他3体であった。このうち棺棚に葬られていたのは109体であり、解剖学的に頭位が判別できるのは22体であり、奥壁側に頭位を向ける遺体が19体存在した(図6)。

このようにパールシャミン神殿境内地下墓、C号墓、E号墓、F号墓、H号墓の遺体の棺棚への納体方向を見てきたが、紀元前2世紀建造のパールシャミン神殿境内地下墓



図6 H号墓北側壁壁龕と棺棚 NL5-0

を除いて頭位の方向は棺柩奥壁が一般的であることが判明した。パルシャミン神殿境内地下墓は、建造時期が他の地下墓に比べ古く、遺体に伴う副葬品や木棺の存在などパルミラで現在岩石とされる石蓋木棺墓であるG号墓(Saito 2005b)に共通する点も認められることから、この墓が建造されて以降にパルミラの遺体頭位の方向が通路側から奥壁側に変わることを示唆すると思われる。

#### 埋葬時の遺体衣装

上述のごとくパルミラの墓には塔墓、地下墓、家屋墓の存在が知られ、遺体は棺柩に奥壁方向に頭位を向けて埋葬されることが明確となったが、この章ではなぜ頭部の無い遺体が棺柩に存在するのかを言及する重要な鍵を握る埋葬時の遺体の衣装について検討する。現在までパルミラの塔墓、地下墓、家屋墓の3種の墓にどのような衣装で死体が葬られたのか、3種の墓でその衣装も変化したのかという議論はなされていない。生きるパルミラ人の服装については彫像、壁画、モザイク画等を参考に復元されている。しかし、死者の衣装、いわば納棺時の死者の姿については、ほとんど言及されていない。唯一パルミラで死者の姿を見ることができるのが、所謂ミイラと呼ばれている遺体である。このミイラは、墓の谷のアテナタン (Atenatan) 墓、エラベール (Elahbel) 墓、ヤムリコ (Iamlikhā) 墓などの塔墓から発見されたり、西南墓地の盗掘で持ち出されたりしたものである。その一部はパルミラ博物館で展示されている。この展示されたミイラを観察すると遺体には布が巻きつけられている。現状では布が剥がれ、一部皮膚や骨が覗いている。その状況から観察できることは、足には革靴もしくは植物繊維の草履等の履物を履いている。さらに日常用か葬儀用かはわからないが、衣服を身に着けている。そして、体中央には手に携えられた木製杖が置かれている(図7)。この遺体は熟年男性だと考えられる。衣服の上に布が巻きつけられ、範囲は頭先から足先までの全身完全に布覆われ、顔も履物も見えない状態である。布は幾重にも巻きつけられ、3~8枚の重なった状態が確認されている。顔面にはデスマスクのようなマスクは認められない。そして布にはかなりの香料が塗布されており、それは今でも匂いを醸し出している。パルミラのミイラは、エジプトの制作手法を知りながらも、さまざまな過程で異なった手法を用いていることが指摘されている (Rahmo 1993)。特に脳や内臓の抜き取り方、その後の詰め物、最後に巻く布の種類などが異なっている。このミイラの外部組織学調査はイタリア・トリノ大学とパルミラ博物館の合同で2004年に実施されている (Giroto et al. 2005) が、X線やスキャニング等の詳細な科学的な調査は何も実施されていない。



図7 エラベール塔墓発見ミイラ (Al-Hariri 2009)

現在、パルミラではミイラとして遺体が発見される墓は塔墓に限られている。というのは、塔墓は地上に建造された構造物であるために、埋葬後に遺体は湿気に脅かされることはなく、乾燥した空間の中で埋葬されて以後、盗掘などの妨げ行為がない限り、同じ条件の中で保たれているために、遺体は保存状態が良く遺存すると考えられる。それに引き替え、地下墓は、地中に棺が敷設されているため、土壤に含まれた水分による湿気もあるが、秋から春にかけての雨期による雨水の墓室への侵入によって有機物の腐食が極度に進行するために遺体の肉や衣服は腐敗し、失われている。そして家屋墓は、塔墓同様に地上構造物であり、遺体が葬られる棺柩は、塔墓以上に乾燥した空間を構造上、提供している。しかしながら家屋墓は、墓の四周壁が薄く、塔墓ほど重厚な構造物ではないために、274年のパルミラの陥落以降、石材の再利用と盗掘のために破壊が進行した。この破壊こそが、家屋墓の上部や四壁がなくなり、葬られた遺体が雨水などの湿気に曝される状況を生み出した。それゆえ、地上に建造された家屋墓に葬られた遺体も、遺体を取り巻く有機物はほとんど腐食したと考えられる。

このように現在まで、パルミラの墓においてミイラは兎も角として、遺体をどのような衣装で葬ったかは塔墓から発見されたミイラと呼ばれる遺体を検証するしかない。だが、塔墓に葬られた遺体の衣装が、地下墓、家屋墓に普遍的に採用されていたのかは、地下墓、家屋墓の有機物の消滅した白骨化した遺体からだけではわからない。しかし、それを推測する手がかりが、F号墓の発掘調査の中に含まれていた。

F号墓は、盗掘を幾度となく受け、遺体が分割され、異

なった棺柩・棺に移動していることが確認されている。この墓の盗掘は、装身具を狙ったことは明らかである。というのは棺柩 EL1-4・3の2棺から検出された遺体は、頭骸骨が切り取られ、遺体の頸骨が棺の入口に覗いた状態で検出された。これは非常に異様な状態であり、故意に遺体が引っ張り出され、棺入口部で頭骸骨が切り離されたとしか考えられない状況を示していた(図8~9)。特にEL1-3の遺体は熟年男性であり、棺柩 EL1-4の直下に位置し、頭部を除く骨格は交連状態で北向きの横臥した状態で検出されている。すでに指摘したようにパルミラでは仰臥の状態

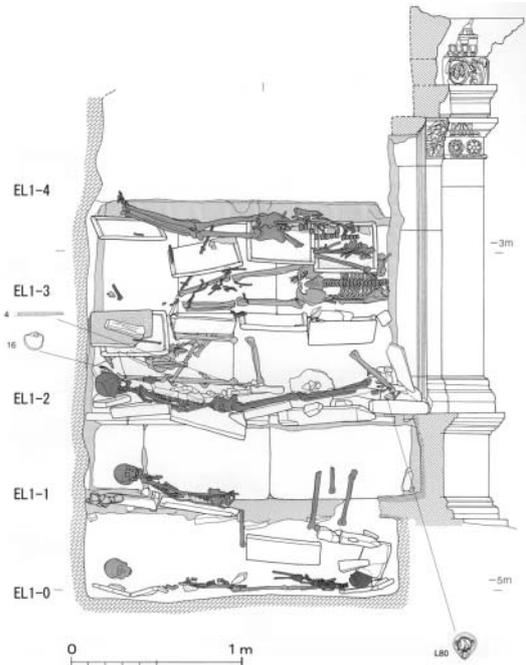


図8 F号墓棺柩 EL1 立面図 (Higuchi and Saito 2001)

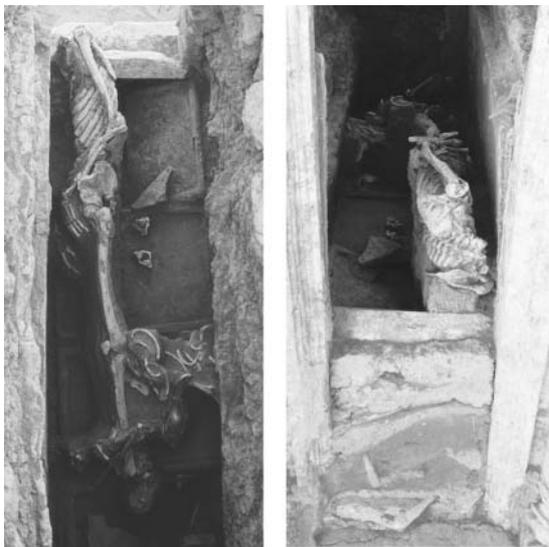


図9 F号墓棺柩 EL1-3 検出状況 (Higuchi and Saito 2001)

で棺柩に納められるのが一般的であることから横臥した頭部の無い遺体の状況は、遺体が動かされたことを示している。この遺体の頭骸骨は墓室を挟んで向かい側のWL3-0から出土しているが、下顎は認められなかった。このWL3の棺柩からはWL3-0の頭蓋骨以外、他に全く人骨は出土しておらず、未使用の棺柩である。そして下顎骨はさらに離れたEL4-0の棺柩入口直下から出土している。このようにそれぞれ離れた状況で検出されたWL3-0の頭蓋骨とEL4-0の下顎骨、そしてEL1-3の体部頸骨は、それらの接合状態から同一遺体と判断されている(Nakahashi 2001)。この状況は、盗掘者が頭骸骨を切り取ったのち、不要な頭骸骨と下顎骨を他の棺柩に投げ込んだと考えられる。またEL1-4の遺体の頭骸骨は調査では見つからなかったが、他の残りの骨から成年男性であると同定されている。

棺柩 EL1-4・3の両遺体の骨格は交連した状態であり、特にEL1-3の頸骨の状況から判断すると頸が切られた時は、かなりまだ肉が残っていた状態であった。なぜこのようなことが起こったのか?この墓は、門構えや門上に刻まれた譲渡碑文からかなり有力な家族の墓であることは明白であり、274年のパルミラの陥落以降に墓の維持管理機能を失ったために、すばやく盗掘者の標的になったと考えられる。これを示すかのようにパルミラ陥落以降の3世紀末~5世紀初め(Fellman 1975)の使用痕跡のあるランプが遺体を埋葬する棺柩ではなく埋葬施設の外側である墓室内から出土している(図10)。

棺柩は、墓室床面下1段とその上に4段の計5段からなる場合が多く、埋葬は基本的に最下段から上の段へと埋葬がおこなわれるため最上段が最も時間的には新しい埋葬となる。それゆえ、EL1-3・4のように遺体が腐食せずに交連した状態であることは、まだ水分による腐食も進行していない状態であると考えられる。さらにその際、遺体の性別がわからない状態であったとも言える。

パルミラにおける盗掘は、装身具をターゲットにおこなわれているが、パルミラでは装身具を身に付けて葬られているのは女性に限られる。特に装身具の中でもネックレスやペンダントに金製品や大型の縞瑪瑙、ラピスラズリ、ガラス玉などが使用され、遺体に装着される(西藤 2004)。しかし首を切られたEL1-3・4の2体は、男性であったために

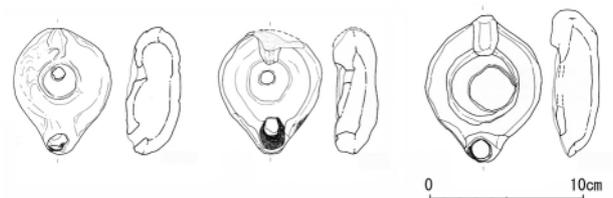


図10 パルミラ崩壊以降のF号墓主室内出土ランプ (Higuchi and Saito 2001)

装身具は身に付けていなかったと考えられる。それでは、これは何を意味するのか？ つまり、盗掘者が遺体の首を落とす段階では女性か男性か判別できない状態であったことがうかがえる。それは、遺体の衣装に根拠を求めることができる。首を落とされた遺体は、盗掘者が墓に侵入し、装身具を得るために首を落とす際に遺体には男女の判別するための特徴がなく、見境なく首を切り落としたと考えられる。まさに首を切り落とされた遺体は、塔墓で発見されたミイラと呼ばれている遺体と同じような衣装をしていたことを予見させる。その姿こそ性別の判断が不可能なことを表し、装身具もミイラの杖のごとく、遺体に直接装着させたと考えられる。遺体を巻いた布の上からは何らの装身具も身に付けさせないことを表している。盗掘者による遺体の頭を切り落とす行為は、エラベール塔墓から出土し、パルミラ博物館に収納されている遺体にも頭部のない遺体が存在する (Rahmo 1993) ことから、盗掘者による遺体への行為が塔墓と地下墓において基本的に近似することを示している。トリノ大学・パルミラ博物館チームの調査によると、ミイラ作成時に脳を抜き取る方法として2種類の方法がある。1つは鼻を切開し抜き取り、もう1つは首を切り取り、大後頭孔から抜き取る方法である。後者の場合は頭部と胴体が切り離されるが、脳を抜き取った後は、木の棒を差し込んで両者を合体させ、布を巻く方法が取られている (Giroto et al. 2005)。いづれにしても、布が巻かれた遺体は外観上、その遺体の首が一度外されているか否かは判らない。

さらにF号墓の2体の遺体からは盗掘者の努力を想像することができる。前章で述べたごとく、遺体を棺棚の棺に納める場合、ほとんどの遺体は頭位を棺奥壁に向けて葬られている。しかし、F号墓の場合、何に起因するかは不明であるが、子供3体と女性1体だけが入口に頭位を取っていた。だが、男性はすべて奥壁に頭位をとっていることから、頭位を入口側に向けた首を落とされた遺体も当初は奥壁に頭位を取っていたと考えられる。盗掘者は、遺体を棺棚から引っ張り出し、そして遺体を脚から入れなおし、頭部を切断し、装身具の有無を確認し、頭骸骨を放り投げたと考えられる。そのため発掘時に頭部のない遺体は入口に頭位を取っていたと思われる。このように地下墓に葬られた遺体は、外観だけでは男女の判別はできないほど、布は幾重にも巻かれ、盗掘者の手を煩わしたことに想像は難くない。これは塔墓の遺体の衣装と地下墓の遺体の衣装が近似していたことを示す例と考えられる。おそらく地下墓に遺体が埋葬される際も塔墓と同様の衣装であったと考えられるが、後世、地下墓に水が浸入し、遺体が腐食することをさほど考慮していなかったと考えられる。それゆえ、発掘時に目にする遺体の姿は、塔墓と地下墓では全く異な

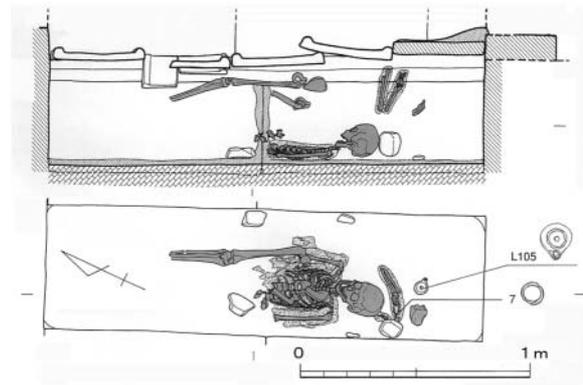


図 11 F号墓奥棺室棺棚 ML4-0 (Higuchi and Saito 2001)

るものと思われる。しかし、遺体そのものは動いた可能性はあるがF号墓の奥棺室の棺棚 ML4-0の棺から検出された若年 (性別不明) の遺体の上半身に布状の有機物の痕跡が付着し、手先までも有機物に覆われていた (図 11)。それは、遺体が布に包まれていたことを意味していると考えても良いと思われる。おそらく、今後丹念な調査を続け、遺存状況が良ければ、地下墓でも埋葬者の装束の痕跡をさらに見出すことは可能であると考えられる。そしてそれは、家屋墓も同様であり、塔墓から地下墓さらに家屋墓へと墓の外観は大きく変わるものの、遺体の衣装は変わっていないと考えられる。

しかしながら、遺体のミイラ化には問題を含んでいる。その問題とはパルミラの紀元前1世紀から紀元後3世紀の塔墓、地下墓、家屋墓に葬られた遺体がすべてミイラ化されたのかということである。遺体を葬る衣装は同じでも、遺体に施す処置は、現実的には塔墓と地下墓では異なることが明らかである。それは、ミイラ化する際に脳を抜き取ったことが塔墓発見のミイラの観察から報告 (Giroto et al. 2005) されているが、東南墓地の地下墓であるC号墓発見の60体あまりの頭骨の観察<sup>2)</sup>では脳を抜き取った際に生じるであろう痕跡が一切認められなかったことである<sup>3)</sup>。これは地下墓ではミイラ化された遺体は存在しない可能性を含んでいる。また塔墓でもすべての遺体がミイラ化されたのかという問題も提起できる。

おわりに

パルミラの遺体の埋葬法の一齣を、東南墓地F号墓において検出した頭のない人骨とパルミラ博物館に展示されている塔墓出土のミイラとの比較・検討によって垣間見ることができた。塔墓、地下墓、家屋墓という3種類の異なった墓において遺体を同じ姿で埋葬している可能性が高いことが判明した。F号墓における頭部のない遺体の存在は、女性の装身具を狙った盗掘者によって引き起こされた。その際、盗掘者は遺体の外観から男女の性別を判断する特

徴・材料が無かったことを意味している。その状況が塔墓出土のミイラの姿に近似する可能性が考えられる。さらに地下墓の棺柩に遺体を葬る方向は、頭位を棺奥壁に向けることが、東南墓地C号墓、E号墓、F号墓、H号墓の発掘調査によって埋葬当時の位置を保った遺体の検討から考えることができた。

パルミラの墓において遺体は男女を問わず布に包まれ、棺に納められる。その際、頭部から棺奥に向けて遺体は葬られた。この当然とも言える結論は、古代パルミラ社会の葬送における埋葬行為の初歩的な復元であり、パルミラの葬制に関わる基礎的な実証である。また、この結論を導く契機となった頭の無い遺体は、盗掘という行為の中にパルミラ崩壊(274年)以降のパルミラ社会における家族墓の所有・管理の断絶性を潜在させていることを明確に示唆してくれた。

しかしながら遺体埋葬の方法についてはまだ多くの追求しなければならない問題がある。それは塔墓におけるミイラ化した遺体の存在が、本研究の塔墓と地下墓における遺体の容姿の類似という結論に対してさらなる課題へと導くものである。塔墓の遺体がすべてミイラ化して葬られたのか、また地下墓に葬られた遺体に意識的にミイラ化された遺体が存在するのかなど、人類学と協調しながら解決しなければならない課題である。

#### 謝辞

本稿の執筆にあたってはパルミラ古物博物館関係総局 Waleed Asʿad 総裁、パルミラ博物館 Khalil Al-Hariri 館長にはミイラを実見する機会を与えて頂き、またパルミラ遺跡調査に関わってくださった方々、特に中橋孝博先生、佐々木玉季氏にはお世話になったことを最後に記しておきたい。

この研究は(独)日本学術振興財団科学研究補助金基盤研究(A)20251008「古代パルミラの葬制の変化と社会的背景にかかわる総合的研究」および文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」による。

#### 註

1) 1959年以来、数多くの地下墓が調査されているが、文章および図等で遺体の状態を詳細に表現された報告はない。

- 2) パルシャミン神殿境内地下墓は明らかに集団墓であるが、家族墓を示す碑文はない。
- 3) 2009年10月の中橋孝博氏の再調査。また以前に調査したF・H号墓でも頭骨から脳を抜き取った際に生じる痕跡を確認していないとの教示を得る。

#### 参考文献

- Al-Hariri, Khalil 2009 *Discover Palmyr*. Damascus.
- Fellmann, Rudolf 1970 *Le Sanctuaire de Baalshamin a Palmyre Vol.V -Die Grabanlage-*. Institut Suisse de Rome.
- Fellmann, Rudolf 1975 *Le Sanctuaire de Baalshamin a Palmyre Vol.VI -Kleinfunde-*. Institut Suisse de Rome.
- Giroto, Marilena, Khalil Al-Hariri, S. Al-Kayem, R. Boano, S. Harter-Laiheugue, C. El-Bcheraoui, D. Cheve, E. Fulcheri, E. Massa and G. Boetsch 2005 The Mummies of the Archaeology Museum of Palmyra. *Journal of Biological Research* 80/1: 262-267.
- Higuchi, T. and T. Izumi (eds.) 1994 *Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria - Surveyed in 1990-92*. Nara, Research Center for Silk Roadology.
- Higuchi, T. and K. Saito (eds.) 2001 *Tomb F-Tomb of BWLH and BWRP-Southeast Necropolis Palmyra, Syria*. Publication of Research Center for Silk Roadology Vol. 2. Nara, Research Center for Silk Roadology.
- Michalowski, Kazimierz 1960 *Palmyre-Fouilles Polonaises 1959*. Warszawa, Universite de Varsovie.
- Nakahashi, Takahiro 2001 Human Skeletal Remains. In Higuchi and Saito (eds.), 145-163.
- Rahmo, Rani 1993 *Les Momies de Palmyre*. Damascus.
- Saito, Kiyohide 2005a Palmyrene Burial Practices from Funerary Goods. In Cussini, Eleonora (ed.), *Journey to Palmyra Collected Essays to Remember Delbert R. Hillers*, 150-165. Leiden, Brill.
- Saito, Kiyohide 2005b New Discovery in Palmyra 2001. *The International Conference on Zenobia & Palmyra 2002*: 131-143. Al-Baath University.
- Sugihara, Michihisa 2001 Location of the Underground Tombs around Tomb F. In Higuchi and Saito (eds.), 212-215.
- 西藤清秀 1996 「パルミラの地下墓に見る乳児墓について」『第3回ヘレニズム～イスラム考古学研究会』発表要旨 ヘレニズム～イスラム考古学研究会、金沢大学。
- 西藤清秀 2004 「パルミラにおける女性の埋葬」『第11回ヘレニズム～イスラム考古学研究会』15-19 ヘレニズム～イスラム考古学研究会。
- 西藤清秀 2005 『パルミラにおける葬制とその社会的背景に関わる総合的研究』平成13年～16年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書。

西藤 清秀

奈良県立橿原考古学研究所

Kiyohide SAITO

Archaeological Institute of Kashihara, Nara